目次に戻る

音楽科教育法における歌唱指導方法の扱い

The Position of Teaching Techniques for Singing in the Elementary Music Methods Course

緒　方　　満
Mitsuru OGATA

キーワード：音楽科教育法・歌唱指導・声域の確保・頭声的発声・小学校教員養成

はじめに

小学校音楽科教育において歌唱指導が適切に行われることは重要である。したがって，小学校教員は正しい歌唱指導方法を身につけておかねばならない。そのためには，小学校教員養成段階において，教員志望者が歌唱指導に関するどのような学びを修めるかが鍵となる。本稿では，第 1 章において，小学校教員はどのような歌唱指導に関する知識・技術を習得しておくべきかについて子どもたちの実態をふまえながら言及する。第 2 章において，初等音楽科教育法における歌唱指導方法の扱いをどのようにすべきかについて筆者の実践をもとに提案する。

1　小学校教員に求められる歌唱指導の知識・技術

ところで，一般的な小学校教員のうち，音楽科授業の遂行に苦手意識をもつ者はかなり多いように思われる。何をどのように指導すればよいのか，とりあえず歌わせたりリコーダーを吹かせたりしているのが実状という状況をしばしば耳にする。我が国の多くの小学校に音楽専科教員が配置されているが，このことは音楽科授業が上記のようなある意味困難な側面を有していることを端的に表している。しかし，どんなに苦手意識や困難感があろうとも，小学校教員である以上，すべての子どもたちに対して責任ある音楽科授業実践を行うために，それらを払拭できるような音楽科指導方法の知識・技術を学ばねばならない。特に，音楽科教育の主要部分を占める歌唱活動は，授業に限らず，学級活動，特別活動，さまざまな行事等においても実施する機会が多い。したがって，冒頭でも述べたように，すべての小学校教員は正しい歌唱指導方法を身につけておかねばならない。

歌唱指導で重要なことは，「歌声づくり」という指導用語に表されるところのいわゆる発声指導である。さらに，「歌声づくり」は，第 1 段階の「話し声と歌声との違いの把握」，および第 2 段階の「声域の確保」という 2 つの段階に分けることができる。

(1) 話し声と歌声との違いの把握

「話し声と歌声との違いの把握」は，小学校学習指導要領 6 音楽〔第 1 学年及び第 2 学年〕2 内容 A 表現（1）ウの「自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと」，さらにエの「互いの歌声や伴奏を聴いて，声を合わせて歌うこと」の内容そのものと言ってよい。

言葉を発することと歌うこと，つまり話し声と歌声とは密接な関係にあり，乳幼児の時期，両者は未分化であるとも言える。そして多くの子どもたちが，歌唱の際に話し声と歌声との区別をせずに発声することがあるため，「どなり声」で歌うこともしばしばである。あるいは，聴き取れない

くらいのか細い声で歌う子ども，低い声でだらだらとつぶやくように歌う子どももいる。このような不適切な歌唱に陥らないために，歌うときには歌声でという指導が必要なのである。

子どもの望ましい歌声は，柔らかで澄み切った声色であり，声に伸びやかさがある。そして，発音が明瞭で音高・音程とも意識的にコントロールされている。周囲の歌声や伴奏ともマッチして心地よく響く。

さて，最も有効かつ重要な指導は，教師自らが模範となる歌唱モデルを示すこと，すなわち示範である。歌唱時の声色，発音，呼吸，姿勢，顔の表情などのポイントをわかりやすく示範することである。できることなら望ましくない不適切な歌唱も示せるとより分かりやすい指導になる。

そのような教師の示範に引き続き，子どもに模倣させる。歌声も歌い方も即座に真似をさせることが重要である。子どもたちが学校生活にも慣れ，音楽科の授業にも安心して参加できるようになった頃には，クラス全員が聴いている中で，1 人ずつ歌う活動も有効である。例えば，「○○さん」「はーい」という応答唱を，繰り返し続ける活動である。拍の流れにのって，途切れずに《全員で「○○さん」（音高は A4・G4・A4）→ 1 人で「はーい」（音高は A4・G4・A4）》という流れで，全員分の氏名を呼び終わるまで行う。慣れてきたら，「○○さん」（音高は A4・G4・A4）→ 1 人で「はーい」→「（階名唱で）ラソラ」（音高は A4・G4・A4）とつけ加えたりする。この活動を実践できれば，教師側の利点として，毎時間すべての子どもの 1 人ずつの歌声を聴くことができ，子どもの歌声の状況を知ることができる。このことによって，1 人ひとりの実態に応じた歌唱指導が可能になり，さらに有益な効果が期待できる。

(2) 声域の確保

声域の確保は，頭声的発声の指導と言える。学習指導要領では，〔第 3 学年及び第 4 学年〕2 内容 A 表現（1）ウに示された「呼吸及び発音の仕方に気を付けて，自然な無理のない歌い方で歌うこと」が，子どもに声域を確保させることにつながる頭声的発声を学習することを意味していると解釈できる。学習指導要領解説音楽編（2008）では，「自然で無理のない歌い方で歌う」とは，従来行われている頭声的な発声と差異はないと説明されている。

多くの子どもが好む合唱曲に「君をのせて」（宮崎駿作詞，久石譲作曲）がある。この歌の最高音高は E5 である。つまり，この歌を十分に歌いこなすためには，E5 という高音域の音高を安定して響かせることが必要になる。その他にも，小学校で取り上げられる多くの歌に F5，G5 などの音高が出てくる。これらの歌を歌うために「声域の確保」は重要である。

歌唱経験の豊富な子どもの声域は，G3 から A5 あたりであると思われる。しかし子どもは，この範囲のすべての音高を同じ歌い方で歌っているわけではない。概ね，低音域（G3 ～ E4 あたり：下声区と呼ばれる）は胸声という共鳴ポイントを胸のあたりに置いた歌い方で，中音域（C4 ～ A4 あたり：中声区と呼ばれる）は中声という共鳴ポイントを口のあたりに置き声帯全体を振動させる歌い方で，高音域（A4 ～ A5 あたり：上声区とよばれる）は頭声という発声ポイントを頭部あたりに置き声帯を部分振動させる歌い方で，というように 3 種類の歌い方を駆使して広範な声域を確保している。このように，複数の歌い方を自在に使いこなすこなすことを，「歌声の使い分け」と言う。本格的な児童合唱では，より洗練された統一感のある歌声の響きを作り出すために，かなり低い音域まで上声区の歌い方（頭声的発声と言われる）で歌わせることも多い。ここで重要なことは，子どもに高音域を確保させるには，子どもにそのことにつながる頭声的発声と「歌声の使い分け」を指導する必要があるという点である。

頭声的発声は，日常的な発話ではほとんど使うことがない。歌唱経験が豊富な子どもは自然とこ

の歌い方を身につけているケースも多いが，歌唱経験の少ない子どもにはいったいどのように声を発すればよいのか把握しづらい面がある。特に，話し声のトーンが低めの子どもや，少ししわがれ声の傾向にある子どもは，特にそういった面が強い。

さて，最も効果的な学習の導入として，擬声語あそびが考えられる。子どもは物真似が大好きである。「ヒューン，ヒューン」という風の音，サイレンの音，お化けが出てくる音などを自由に表現させる。次に，さまざまな動物の鳴き声で歌わせ，頭声的発声のイメージを把握させる。

多くの男子が歌いたくてたまらない歌に「宇宙戦艦ヤマト」（阿久悠作詞，宮川泰作曲）がある。しかし，この歌は，最低音高がA3，最高音高がF5である。つまり先述した3種類の歌い方を駆使しなければ，この歌を歌うことができない。筆者は，男子の歌唱意欲を適宜引き出しながら，この曲を歌わせることによって頭声的発声を学習させることにたびたび成功している。高音域のフレーズでは，あえて伴奏の音量を小さくするなどの工夫をすると，多くの子どもが高音域を頭声的発声で歌い始める。その瞬間をとらえて，子どもを称賛することが頭声的発声の習得を前進させる。

子どもが頭声的発声を着実に自分のものとするまでには，子どもによって個人差があるものの，概して時間がかかる。それは，子どもが歌っている最中に，声帯の全体を振動させているのか，つまり胸声や中声で歌っているのか，あるいは声帯のある部分を振動させているのか，つまり頭声で歌っているのかを，自己判断しにくいことに起因しているようである。教師も，ときどき，子どもの歌声を表面的に聴いただけでは，子どもがどちらの歌い方をしているのかを判別しづらいことがある。

頭声的発声を定着させていくには，弱声で歌わせることが有効である。子どもが小さい音量で歌っているときの声帯には，無理な力がかかっておらず柔らかい状態が保たれやすくなっている。したがって，子どもは容易に声帯の部分振動，すなわち頭声的発声が可能になる。実際に，A4 ～ D5ぐらいの音域のゆったりした歌を弱声で歌わせると，多くの子どもたちが美しい頭声的発声で歌い出す。その歌声を称賛しつつ，子どもにも自己の耳で確認させながら，子どもに歌い方を習得させていくことが大切である。

(3) 音高はずれへの対処

ここまで，第1段階として，子どもに話し声と歌声との2つの声の違いを把握させ歌唱の際には歌声を使用する習慣を身につけさせること，第2段階として，子どもに声域を確保させるために頭声的発声を習得させること，の2点を歌唱指導のポイントとして取り上げてきた。教師がこの2点を意識的に指導し，その指導によってほとんどの子どもが歌声を入手できたとすれば，小学校で扱われる歌唱教材曲のすべてについて，その教材曲の初めから終わりまでを十分に歌唱することが可能である。また，高学年の男子が変声期に入り，歌声を自在に駆使できない状況になっても，この2点がしっかり身についていれば，多少の不十分さはぬぐいきれないものの一定の歌唱活動の続行が可能である。

ところで，音楽科教育における歌唱指導には，歌唱スキルに関する，見過ごすことのできない重要な問題がある。それは，音高はずれで歌唱する子どもがいる，という問題である。音高はずれとは，調子外れ，音痴などとも称される，正しい音高でうまく歌唱できないという状況を表す語句である。もちろん，ここまで述べてきた歌唱指導をていねいに行えば，入学当初に音高はずれで歌唱していた子どもの数は，学年が上がるにつれ確実に減っていく。つまり，本稿で述べてきた歌唱指導は，音高はずれで歌唱する子どもの出現を未然に防ぐための指導でもある。

しかしながら，ごく少数の子どもは，音高はずれでの歌唱から脱しきれないという実情を現在否

定することはできない。ここでは，この音高はずれで歌唱する子どもへの歌唱指導はどうあるべきか，について述べていきたい。

聴覚障害や重度の嗄声といった特別な場合を別にして，音高はずれで歌唱する子どもは，これまで適切な歌唱学習を受ける機会がなかった子どもである，ととらえるべきである。実際，そのような子どもは幼少の頃からの歌唱経験が著しく少なかったり，未学習であったりする場合が多い。そうであるならば，一定の歌唱経験と学習を重ねることによって，音高はずれは改善に向かうはずである。

さて，音高はずれの子どもに対する具体的な指導方法は，授業外に設定し，個別にあるいは2ないし3人で行う方がよい。

音高はずれで歌唱指導する子どものタイプはさまざまである。他の子どもに比べて，ふだんの話し声のトーンがかなり低い子どもがいる。このタイプの子どもは，歌声で歌うことができにくく，低い声でぶつぶつとつぶやくように歌っていることが多い。その歌っている声を注意深く聴くと，正しい音高ではないものの，歌うべき旋律のおぼろげな輪郭は聴き取ることができる。そして，伴奏のキーを5度ぐらい下げ，その伴奏に合わせて歌わせると，正確な音高で歌うことができることがある。そうであったならば，このような歌唱を繰り返し行わせ，伴奏に歌声を合わせることを十分に実感させながら，徐々にキーをあげていくという指導が有効である。

正確な音高で歌唱することもあれば，不正確な音高で歌唱することもあるというタイプの子どもがいる。そのほとんどが，頭声への切り替えがうまくできておらず，しかもそのことを自分で認識できないことが原因である。歌っている自分の声を，自分自身でしっかり聴きながら歌うことを習慣づけ，意識的に声の使い分けができるように指導することによって改善に向かわせる。

発声すべき音高を把握できず，その音高に自らの声を合致させることがほとんどできないタイプの子どもがいる。歌わせると，まったく一本調子で歌う。その改善には，かなりの期間がかかると考えられる。この場合，心理的側面における音高の弁別能力に問題があると考えられる。2つの音高を比較させ「同じ－違う」等の音高を弁別する訓練を行い，音高に関する音楽能力のつまずきを改善するところから始めることが必要である。

2　初等音楽科教育法における歌唱指導の扱い

筆者の所属する比治山大学現代文化学部子ども発達教育学科の音楽科教育法では，歌唱指導に関する講義は，全15回のうちの第3回，第4回，第5回の計3回実施している。本章では，それらの講義概要を報告することで，歌唱指導方法に関する扱いをどうすべきかの提案としたい。

第3回講義：児童の歌声の発達－子どもの歌声って，どのように発達するの？－
第4回講義：歌唱指導の方法（1）－歌い方ってどうやって教えるの？－
第5回講義：歌唱指導の方法（2）－どうやって歌唱・合唱させるの？－

講義の目的は，音楽科授業において適確な歌唱指導が実践できるようになるための，知識・技術を確実に習得させることである。

(1) 第3回講義（歌唱指導編第1回）：児童の歌声の発達

学生たちは，小学生の歌声に関してほとんど何も知らないと言ってよい。当然，前章で述べた知識･技術ももちあわせていない。だからといって，ただ単に知識と技術を一方通行の講義で伝えても，

実践力にはつながりにくいと考えられる。

そこで，筆者は，学生に子どもの歌声の発達VTRを，実際に視聴させ，それから子どもの歌声について理解させるようにしている。具体的には，子どもの1年時から6年時までの歌声の変容を記録した「6年間の歌声の記録」を視聴させている。

それをみれば，第1学年ではまだ話し声で歌う子どもが多いこと，第2学年では歌声を意識し始めること，第3学年では頭声的発声で歌うこと，第4学年では合唱ができるようになること，第5学年ではより豊かな響きの頭声的発声ができるようになること，第6学年では変声期の子どもが出現するものの自立した合唱ができることといった，学年ごとの歌声の発達の様相が理解できる。

それは，学生自身に気付きを書き留めながら，そしてVTRに出てくる歌はすべて実際に歌いながら，さらに学習指導要領とも照らし合わせながら視聴させている。このことによって，児童の歌声に関する実践的な理解が深まると考えている。

(2) 第4回講義（歌唱指導編第2回）：歌唱指導の方法（1）

第1章で述べた歌唱指導の知識・技術，特に「話し声と歌声の違いの把握」,「声域の確保」を中心に講義していくが，必ず学生自身に教授内容にふさわしい歌をできる限り歌わせるようにしている。歌わせる曲は,「わたしのとけい」,「あの雲のように」,「恋するにわとり」,「北風小僧の寒太郎」,「お料理行進曲」,「宇宙戦艦ヤマト」,「となりのトトロ」と多数である。学生自身が体得できるように多くの曲を存分に歌わせている。男子学生にもときおりファルセットで歌うことを体験させ，頭声的発声を十分に理解できるようにしている。各曲を取り上げるねらいは以下のとおりである。

○「わたしのとけい」（作詞：新沢としひこ　作曲：中川ひろたか）

この歌には「コチキンカッチンコトピン」擬声語が繰り返し登場する。この部分を取り出し「話し声と歌声の違いの把握」を理解させる。

○「あの雲のように」（作詞：芙龍明子　作曲：不明）

優しい甘美なメロディーがいわゆる「歌声」をイメージさせやすい。弱声で柔らかく歌わせると学習効果が高い。

○「恋するニワトリ」（作詞作曲：谷山浩子）

ニワトリの鳴き声を模写した「ココココーココーココーココーココココ　こーいはーこいは恋」というフレーズを利用して，頭声的発声を体感させるのに適した歌である。

○「北風小僧の寒太郎」（作詞：井出隆夫　作曲：福田和禾子）

歌詞に出てくる「ヒューン　ヒューン」という風の擬態語を使い，頭声的発声を習得させるのに適した歌である。

○「お料理行進曲」（作詞：井出隆夫　作曲：福田和禾子）

○「宇宙戦艦ヤマト」（作詞：阿久悠　作曲：宮川泰）

この2曲は，音域がとても広い。あえてこのような音域の歌に挑戦させることにより，歌声の使い分けを駆使させる。そのことをとおして声域の確保を促す教材である。

○「となりのトトロ」（作詞：宮崎駿　作曲：久石譲）

この曲は，始めから終わりまでの曲全体を，あえて弱声で歌わせる。そのことにより，子どもたちは声帯に無理な力がかからないので，響きのある美しい歌声をつくりやすくなる。頭声的発声を定着させることをねらいとした教材である。

(3) 第5回講義（歌唱指導編第3回）：歌唱指導の方法（2）

小学校現場での歌唱指導に関する実践力を高めるには，豊かな歌唱・合唱の指導法について学ばせる必要がある。加えて，将来，小学校教師として音楽科授業を実践するために不可欠となる自らの歌唱力・合唱表現力も向上させる必要がある。

目標の達成にせまるためには，歌唱の際の「発音や呼吸の仕方」，および合唱の際の「各パートのバランスや声の響かせ方」に気を付けることの重要性や意義を，具体的事例をとおして確実に理解させることが必要である。

そのために，本講義では，広島市在住の声楽家の協力を得て独自に作成した視聴覚教材を用いる。その視聴覚教材には，「赤いやねの家」歌唱の望ましいモデルと望ましくないモデル，および「君をのせて」合唱の望ましいモデルと望ましくないモデルなどが収録されている。授業では，実際に2曲の歌唱・合唱を行わせつつ，適宜，視聴覚教材を活用しながら，歌唱指導上の「発音や呼吸の仕方」，「各パートのバランスや声の響かせ方」の2点に関する重要性に気づかせ，理解させ，将来の授業実践に役立たせることができるようにさせたい。

「赤いやねの家」（作詞：織田ゆり子　作曲：上柴はじめ）は，以前，小学校6年生の歌唱教材曲として教科書に掲載されていたこともある。歌詞はこの時期の児童の心情をうまくとらえており，メロディーも美しく平易に創られている。多くの児童にとって，親近感のもてる歌曲である。「君をのせて」（作詞：宮崎駿　作曲：久石譲）は，多くの子どもに人気のアニメ「天空の城ラピュタ」のテーマ曲である。多くの児童が好む魅力的な曲であり，合唱教材として非常に適している。

なお，以下の学習過程は本講義を小学校授業の指導案になぞらえて示したものである。この指導案は学生にも配付し，音楽科学習指導案のモデル提示としても活用している。

《講義の目標（前半の45分）》

・「発音や呼吸の仕方」に気をつけて「赤いやねの家」の歌唱ができる。

・「発音や呼吸の仕方」に関する歌唱指導方法について理解できる。

学習過程（前半）

学　習　活　動	指導の意図と手だて	評価の観点
《導入》 「赤いやねの家」を斉唱する		
・範唱を聴く	○　範唱を示すことで，歌の全体像と旋律を把握させる。	○　範唱を真剣に聴いて，歌を覚えようとしているか。
・歌詞を読む	○　歌詞を朗読させ，歌詞の内容をより深く理解させる。	○　全員で声をそろえて読んでいるか。
	○　数人の児童に歌詞を読んだ感想を発表させることで，歌詞に込められた心情をクラス全員で共有できるようにする。	○　歌詞の内容について感想を発表できているか。
・斉唱する	○　フレーズ毎に区切って歌唱させ，その後斉唱させることで，スムーズに旋律を覚えさせ歌唱させる。	○　旋律を覚え，正しく斉唱しているか。

《展開》 「赤いやねの家」の歌唱表現を工夫する。		
・VTR によるモデル唱を視聴する	○　優れたモデルを聴覚だけでなく視覚でも鑑賞させることで，より優れた歌唱法に気づかせる。	○　モデルの特徴に気づいているか。
・朗読や演劇の発音と，歌唱での発音の違いを理解する	○　歌詞を使った，モデルによるおしゃべり朗読，演劇風の語りを視聴させることで，それぞれの表現における発声様式の違いに気づかせたい。	○　歌唱に必要な発音の様式に気づいているか。
・よりよい発声の仕方を理解する	○　誤った発声のモデルを視聴させることで，望ましい発声の仕方に気づくことができるようにする。	○　大きすぎず，小さすぎず，よりよく響く発音や呼吸の仕方に気づいているか。
《まとめ》 本時の学習を生かして「赤いやねの家」を斉唱する。	○　本時の学習内容を生かした歌唱を行うよう促し，斉唱させる。	○　学習したことを生かして歌唱しようとしているか。

《講義の目標（後半の 45 分）》

・「パートのバランスや重なり合う声の響き」に気をつけて「君をのせて」の合唱ができる。
・「パートのバランスや重なり合う声の響き」に関する合唱指導方法について理解できる。

学習過程（後半）

学　習　活　動	指導の意図と手だて	評価の観点
《導入》 「君をのせて」を合唱する。		
・ソプラノを歌う	○　全員がすでに知っている旋律であるので，初めから終わりまで，のびのびと歌唱させる。	○　全員が参加して歌唱しているか。
・アルトを歌う	○　最初に，どの部分から，合唱になるかを楽譜上で確認させ，アルトパートを区切って歌唱させる。	○　アルトパートの旋律を把握し，歌えているか。
・合唱する	○　どのような事に難しさを感じるかを，考えさせながら，合唱させる。全員にアルトパートを経験させるために，パートを交替させながら 2 回合唱させる。	○　合唱できているかあるいは，合唱がうまくできない部分を把握できているか。

《展開》 「君をのせて」のよりよい合唱表現を工夫する。		
・VTR によるモデル唱を視聴する	○　モデル合唱がどのように聞こえるか，響き合いの美しさに注目させ視聴させることから優れた合唱の特徴に気づかせたい。	○　響き合う合唱に気づいているか。
・各パートの声量のバランスの重要性を理解する	○　望ましくない合唱モデルを視聴させ，そのような合唱が響き合わないことに気づかせたい。このことから，パート毎の声量を統一することの重要性を実感させたい。	○　どういう場合に響きが乏しくなるかに気づいているか。
・各パート相互で聴き合いながら合唱することの重要性を理解する。	○　アイコンタクトを重視した合唱モデル視聴させ，パートの相互に聴き合いながら合唱することの　大切さに気づかせたい。	○　パート相互に聴き合うことで合唱表現がよりよくなることに気づいているか。
《まとめ》		
本時の学習を生かして「君をのせて」を合唱する。	○　本時の学習内容を生かした合唱を行うよう促し，合唱させる。	○　学習したことを生かして合唱しようとしているか。

おわりに

すべての小学校教員が正しい歌唱指導を行えば，子どもたちの音楽活動は飛躍的に豊かになるに違いないし，なにより「音高はずれ」に陥る子どもは激減するであろう。冒頭でも述べたが，教員志望者が歌唱指導に関するどのような学びを修めるかが鍵となる。多くの教員用養成系大学で望ましい歌唱指導の扱いがなされるために，本稿が参考になれば幸甚である。

【主要引用・参考文献】

・梅本堯夫（1999）『シリーズ人間の発達Ⅱ　子どもと音楽』東京大学出版会
・文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説　音楽編』教育芸術社
・吉富功修・三村真弓編著（2010）『小学校音楽科教育法　学力の構築をめざして』ふくろう出版